

実践的教育・研究「今瀬ゼミ：とちお祭への裏方参画と調査・情報発信」

—地域を支える「裏方」と必要性からの「協働」—

長岡大学准教授 今瀬 政司

1. 問題意識：「誰がどのように地域を支えるか」

地域を活性化していくには、「自助」「共助」「公助」の推進、そのための組織づくり、地域づくりが大事だと一般によく言われる。だが、地域の現場では、「助け合うにも人がいない」、「組織があっても実際に動く人がいない」、「結局、誰がやるのか」、といった現実と直面することが少なくない。そのため、「誰」が地域を支えるのか、地域を活性化する「担い手」が具体的には誰なのか、そのことが問われる。

また、そうした地域の担い手たちが、具体的にどのような取組みを行うのか、どのように「協働」して行うのか、そのことが明らかになることも重要となっている。

本稿では、地域活性化の取組みであり、かつ大学における実践的教育・研究の取組みの一事例として、筆者が担っている長岡大学 今瀬政司ゼミナールによる2014年度『とちお祭への裏方参画と調査・情報発信 ～長岡・栃尾地域を元気にするために～』の事業を紹介する。そして、その地域活性化の実践的教育・研究を通じて浮かび上がった事として、地域の「担い手」とその取組み方、ならびに「協働」の進め方のあるべき姿を提言する。

2. 実践的教育・研究の内容と成果：今瀬ゼミ『とちお祭への裏方参画と調査・情報発信』

長岡大学 今瀬政司ゼミナールでは、実社会の現場における実践的な活動や調査等のノウハウを学び、社会の中で「生きる力」の基礎を身につけ、地域（社会）の活性化に貢献することを目的に活動している。教員がレールを敷いて、その上に学生を乗せて走らせるといった授業方法ではなく、社会をモノサシにして、学生の自発力・自主性・自律性を育み、学生が自らの生き方・働き方を創造するような教育を行いたいと考えている。

①今瀬ゼミ活動の企画立案における試行錯誤

2014年度の今瀬ゼミでは、2014年4月～6月に「自治と協働による地域づくり」という大テーマのもと、ゼミ生たち自身で、企画書の立案を行うところから始まった。ゼミ生たちが自ら取組み内容を検討して、様々な関係機関に事前取材・相談を行った。最初の企画書（案）は、「長岡駅から過疎地域を繋ぐ」というものであったが、様々な協力機関の方々にご相談し、貴重なご助言を頂いたことで、企画を何度も更新して、試行錯誤を重ねた。その上で、『とちお祭への裏方参画と調査・情報発信 ～長岡・栃尾地域を元気にするために～』という企画書を立案した。

そして、6月から翌年2月にかけて、長岡市栃尾地域（旧栃尾市）における「とちお祭」の「裏方」として、現場での実践活動、調査研究、提言、情報発信、新規の協働事業等を行い（現場活動は30日間超）、栃尾活性化への貢献をめざした。主な取組みの内容と成果は以下の通りである。

②「とちお祭」の歴史と現状の調査

今瀬ゼミの活動の1つ目として、6月～翌1月に、「とちお祭」の歴史を調査して、栃尾地域の経済的な背景と共に整理を行った。

また、2014年度の「第60回とちお祭」の「裏方」スタッフと「表方」参加者としての現場活動を通じて、その実態を調査し、提言や情報発信等を行った（後述）。



今瀬ゼミ生とボランティア学生
（「とちお祭」メイン会場にて）

◇「とちお祭」の歴史と経済的背景

「とちお祭」は、毎年、年に一度行われ、祭り事の多い栃尾の中でも地域を代表する祭りの一つである。その歴史は古く1955年まで遡り、当初は「繊維まつり」として存在していた。栃尾観光協会が1980年に発足して、その翌年に繊維まつりは当時の「うま市」と統合され、名称を「とちお祭」に変えた。「とちお祭」に変わる際には、多くのイベントが引き継がれて、2014年度にも実施された「仁和賀(にわか)行進」や「樽みこし綱引き」は古い歴史を持っている。

当時の「繊維まつり」は、栃尾地域の商工業の中心であった繊維産業と深い関わりがあった。繊維業界が中心となって祭りを行い、「織物求評会」なども行われ、産業の振興・発展の象徴として地域の人たちから愛されていた。また、住民が参加し祭りを楽しむという意図とは別に、「栃尾市の産業、商工業を市内外に周知する」といった広報面での役割を担っていた。当時は、北海道、関東、関西など全国各地から200数十社の商社を招いていたということから、栃尾で繊維工業が如何に盛んであったかが分かる。そして、その後は、繊維工業の衰退に伴い、現在の「とちお祭」の形に徐々にシフトしていった。

「繊維まつり」に転機が訪れたのが、第11回目の1965年である。前年まで繊維まつりと併せて行われていた「織物求評会」が切り離して行われたことで、より一層祭りを盛り上げる必要があった。その方策として、商工会が企画したイベントが、現在の「とちお祭」でも主要イベントとして行われる「樽みこし綱引き大会」であった。2014年度の現在も樽みこし綱引きは、商工会青年部が中心となって企画・実施をする「全日本樽みこし綱引き選手権大会」として、とちお祭に残るイベントである。

◇「第60回とちお祭」(2014年度)の概要

2014年度の「とちお祭」は60周年を迎えて、栃尾の人々にとって大きな一つの節目となった。開催日は、8月23日(土)と24日(日)の2日間で、栃尾観光協会(主催)や長岡市(共催)の栃尾支所が中心となり、栃尾の各町内や諸団体などの協力・参画のもと行われた。

2日間で様々なイベントが行なわれ、地域を盛り上げたが、その中でも注目されたのが次の3つのイベントである。「全日本樽みこし綱引き選手権大会」は、全国でも珍しい、力自慢の男女が樽の載ったみこしを綱引きする、とちお祭の中でも非常に迫力のあるイベントである。「仁和賀行進」は、町内会ごとの参加団体が、時代を反映し趣向を凝らした山車と踊りでパフォーマンスを行いながら町内を練り歩いて、その特色を競い合う。「大花火大会」は、山の頂上から約5,000発の美しい花火が打上げられ、「とちお祭」と栃尾の夏のフィナーレを飾る。その他、とちお祭の幕開けを告げる「オープニングイベント」や、一日目の夜に行われた、伝統の栃尾甚句が通りを埋めつくす「大民踊流し」や、半纏合わせ必見の「みこし渡御」などがあった。



とちお祭のポスター

③祭りの会合等への参加と取材

ゼミ活動の2つ目として、6月～11月に、「とちお祭」の準備段階などで、各種の会合等への参加と取材を行った。祭りの「結団式」や「安全祈願祭」、イベントの「仁和賀行進」、「全日本樽みこし綱引き選手権大会」、「大花火大会」等の会合、事務局スタッフ会合等である。

7月4日、祭りの「結団式」が開催されて、約90人の地元の方々に参加し、事務局から当年度のプログラム等の説明があると共に、互いに親睦を深めた。参加者の多くは高齢の方で、30代ぐらいの若者もいたが人数は少なく、ゼミ生たちの若さが新鮮に映った。今後、高齢の方が抜けてしまった分を如何に埋めていくかが課題として見られた。

各町内のチームが毎年競い合ってきた「仁和賀行進」の部会では、参加団体数が減少してきていることの報告があり(最盛期の15団体から半減)、部会参加者の中からは「来年は仁和賀行進をやめて、それに代わるイベントを

新たに検討すべきではないか」といった意見も出るなど、栃尾地域の過疎化の深刻さを肌身で伺う場となった。

また、部会では、参加団体の住民らが皆で議論をするという雰囲気ではなく、事務局が決めた事項を説明して確認し合うという意味合いが大きいものとなっていた。

「全日本樽みこし綱引き選手権大会」の説明会では、地元住民による参加チームの減少傾向に対して、それを補う形で栃尾域外から若者ボランティアたちによるチームの参加登録が報告された。説明会に裏方参加して取材を行っていた今瀬ゼミ生にも、大会参加の呼びかけがあり、即席チームを結成することとなった。



結団式の様子

④祭りの現場作業と取材（事前準備・当日運営・片付け）

ゼミ活動の3つ目として、6月～8月に、「とちお祭」の現場作業と取材を行った。「仁和賀行進」に参加する栃尾本町区の出し物の準備、祭りの提灯やのぼり設置等の事前準備、チラシ配布等の事前PR活動、会場設営等の前日準備、当日2日間の様々な運営作業、会場等の後片付け等である。

「仁和賀行進」の参加団体（地区）の一つである「栃尾本町区」では、「とちお祭」が近づくと連日のように住民たちが集まって、栃尾中心街の諏訪神社等で準備を進めている。神社の境内には、過去の仁和賀行進で使われていた仮装の衣装、着ぐるみ、小道具などが多数置かれている。それらすべては住民が手作りで作ったもので、その質と量は驚くほどであり、さすが繊維のまちといった印象を受ける。仁和賀行進が毎年行われることで、地区のつながりを豊かに保っている。ただ、他の地区の多くでは、祭りへの参加が減る傾向にあり、栃尾地域の過疎化の課題は大きい。なお、ゼミ生たちは「仁和賀行進」の準備を手伝い、また取材する中で、住民の方々からお声を掛けて頂いて、祭りの「表方」として演技に加わって一緒に躍らせて頂くことになった。



神社境内でポンポン作成

また、8月上旬になると、祭りの事務局が会場周辺でPR用の提灯やのぼり等を設置する作業を行った。ただ、予算などの問題もあってか、その設置場所は限定的な範囲であった。さらに、栃尾の域外からも祭りの見学に来てもらえるように、長岡市役所本庁舎「アオーレ長岡」で事前PRイベントを行うと共に、チラシ配りを行った。だが、来場者の多くは栃尾地域からで、既に「とちお祭」を知っている人が殆どであったため、PR方法には課題も残った。



提灯の取付作業

そして、祭りの前日には、事務局スタッフが総出で会場設営等を本格的に行った。祭りの当日には、前年度までの経験を踏まえて予め緻密に作られた計画書に従って、早朝から深夜まで様々な運営作業を行うと共に、各イベントが終了するごとに設備の後片付け等を行った。

こうした祭りの事前準備・当日運営・後片付け等の一連の「裏方」作業において、今瀬ゼミ生やボランティア学生たち（長岡大学、約10名）は、祭りの事務局スタッフたちに混じって作業を行う共に、その過程を取材メモや写真、ビデオ、録音等の記録に残していった。

⑤大花火大会の現場作業と取材 (事前準備・打上・片付)

ゼミ活動の4つ目として、8月の祭り当日と前後日に、「大花火大会」の現場作業と取材を行った。「とちお祭」の花火は山の頂上で打上げるもので、全国でも珍しいものとなっている。その花火の打上げ場所の事前準備では、枯れ草の清掃、テントや防火水槽の設営等を行い、山の麓にある花火の見学側では大会本部の設営等を行った。

そして、打上げでは花火の筒から10~20メートルの距離のテント等から点火の合図を送った。頭上をほぼ垂直に打ち上がり舞う花火、降り注ぐ花火の燃えかすには圧倒されるものがあった。翌日には、打上げ場所周辺に落ちた燃え殻を回収するなどの片付けを行った。ゼミ生たちは、そうした一連の諸作業すべてを「栃尾煙火協会」の方々と一緒に進むと共に、取材メモや写真、ビデオ等で記録に残した。

花火大会は全国で開催されているが、打上げ関連作業の多くを花火業者等に丸投げしている事が少なくない。だが、栃尾地域では住民たちが「栃尾煙火協会」を結成して、花火師しかできない筒の設置・回収や点火等以外のすべての打上げ関連作業を毎年、住民が手作りで行っている(栃尾に花火業者はない)。その一連の作業は毎年、住民から住民に引き継がれてきたもので、安全を第一に、手際よく、確実にこなすものであった。ただ、現在、花火の担い手がなかなか現れず、後継者への引継ぎが課題となっている。



花火を打ち上げる筒
(雨が入らないように洗面器をかけビニールで覆われている)



花火が打ちあがる瞬間
(火柱が立っている)

⑥祭りのイベントの「表方」への参加と取材

ゼミ活動の5つ目として、祭り当日に、イベントの「表方」として参加と取材を行った。当初の今瀬ゼミの企画では「裏方」に徹する予定であったが、地元住民の方々からのお声かけで、「全日本樽みこし綱引き選手権大会」に出場した(結果は準優勝)。また、「仁和賀行進」では、栃尾本町区の方々が行うパフォーマンスに参加した。

「全日本樽みこし綱引き選手権大会」は、当初、非常に激しい競技と聞いており、敷居の高さを感じていたが、ゼミ生たちが実際に参加してみると、怖さよりも興奮が上回るイベントであった。この面白みを知ってもらえる機会を何らかの形で作ることができれば、地元の若い世代の参加者が再び増える可能性もあるのではないかと考えられた。

「仁和賀行進」では、途中から雨が降ったものの、ずぶ濡れになりながら踊り、多くの見物客が見続けて賑わいを見せた。踊る者と見物客が一体となって楽しむ光景は、これからの栃尾地域にとって貴重なものと思われた。



全日本樽みこし綱引き選手権
大会の様子

⑦今瀬ゼミの「とちお祭」への提言

ゼミ活動の6つ目として、こうした「とちお祭」での「裏方」スタッフと「表方」参加者の現場活動と調査を通じて、「今瀬ゼミのとちお祭への3つの提言」を策定して、10月以降、発表会やパネル展等の様々な機会を発表を行った。

提言1:「とちお祭」で準備・運営・片付けなどを行う「裏方さん」の大変さ、大事さ、面白さが地元で再評価されるような仕掛けをして、「裏方さん」(特に、若い人)が増えるようにしていくこと。/提言2:とちお祭の「全日本樽みこし綱引き選手権大会」を栃尾以外の地域の祭において出前開催すること。それにより、樽みこし綱引きの魅力が栃尾内外に波及的に広く知ってもらうこと。/提言3:とちお祭の会場で、地元商店や料理上手な家庭の方などの力を借り、地元の名物料理や家庭料理などの屋台を多く出すようにして、域外からの来場者の楽しみを増やすこと。

⑧今瀬ゼミと地域の協働による仁和賀行進の「出前開催」

ゼミ活動の7つ目として、10月の長岡大学の学園祭「悠久祭」で、とちお祭の「仁和賀行進」を“出前開催”した。栃尾本町区の住民の方々(約25名)と今瀬ゼミによる「協働事業」として、大学キャンパスで合同「栃尾本町仁和賀隊パフォーマンス」を披露して栃尾地域をPRした。

「とちお祭」では、栃尾本町区の「仁和賀行進」で今瀬ゼミも一緒躍らせて頂いたが、住民たちとゼミ生たち間で話が弾み、この仁和賀行進の「出前開催」の独自企画が生まれた。この祭りの「出前開催」により、栃尾を訪れたことのない人にも「とちお祭」の一部を直接に味わってもらうことができた。今後、これが前例となって、「全日本樽みこし綱引き選手権大会」についても、栃尾域外で「出前開催」が行われることが期待される(前述の今瀬ゼミ提言)。



栃尾本町仁和賀隊パフォーマンス
(大学校舎を背景に栃尾住民たちと今瀬ゼミ生らで踊った)

⑨今瀬ゼミと地域の協働による長岡市内巡回「パネル展」

ゼミ活動の8つ目として、今瀬ゼミで「とちお祭への裏方参画と調査・情報発信」の展示パネルを作成した(A1サイズ21枚)。ゼミ活動と「とちお祭」を紹介したもので、長岡大学「悠久祭」でパネル展を開催した。

また、今瀬ゼミと長岡市(栃尾支所商工観光課、市民協働推進室)と栃尾観光協会による「協働事業」として、12月～翌2月に、長岡市内で巡回「パネル展」を開催した(道の駅に隣接する「長岡市栃尾産業交流センターおりなす」、長岡駅前にある長岡市役所本庁舎「シティホールプラザ アオーレ長岡」)。パネル展を通じて、栃尾と「とちお祭」の情報発信を行うとともに、事務局スタッフ等しか知らない、とちお祭の「裏方さん」の大変さや面白さ、大事さを地元住民の方々に知ってもらう機会になればと考えた。



今瀬ゼミ「とちお祭」パネル展

⑩今瀬ゼミの情報発信による栃尾地域PR

ゼミ活動の9つ目として、11月以降、今瀬政司研究室のホームページで(<http://sicnpo.jp/imase-nagaokauniv/>)、ゼミの活動報告等を随時掲載している。また、長岡大学の地域活性化プログラム成果発表会(文部科学省の大学COC事業「地(知)の拠点整備事業」)、「栃尾タイムス」への記事掲載など、ゼミの情報発信を通じて栃尾をPRした。



長岡大学「学生による地域活性化プログラム成果発表会」

3. 実践的教育・研究からの提言：地域を支える「裏方」と必要性からの「協働」

これまで、今瀬ゼミの『とちお祭への裏方参画と調査・情報発信』の事業を紹介してきた。この地域活性化の実践的教育・研究を通じて浮かび上がった事として、地域の「担い手」とその取組み方で重要な「裏方さん」というものについて、また、「協働」を推進する上で重要なあり方について、あるべき姿を提言する。

①地域を支える上で重要な「裏方さん」づくり

地域づくりでは、リーダー、コーディネーター、アイデアを出す人、専門家等のキーパーソンが大事だと一般によく言われる。だが、それらの人がいたとしても、「作業する人がいなければどうにもならない」、「実際に誰がやるのか」、「理想の実現は容易ではない」、といった現実の状況がある。

また、地域づくりでは一般に、地域のイベント等の事業に如何に多数の市民が参加するかが重要とされる。けれども、多数の市民参加があったとしても、市民は「表方」への参加のみに留まっていることが多い。

現在の「とちお祭」でも、各イベントで地区住民の参加が「表方」としてある一方で、それを実施するに当たっ

での企画・準備・運営・片付け等の「裏方」作業の多くについては、祭りの事務局を担う栃尾観光協会（主催）や長岡市栃尾支所（共催）の職員たちが業務として行っている。地区住民が祭りに「裏方」として参画する場面は少なく、そのことが課題として思われた。この場合、地域づくりの実質の波及効果や継続性が高くないと見られるからである。

今瀬ゼミの「とちお祭」での取組みを通じて改めて浮かび上がったのが、「裏方さん」の重要性とそれを増やすことの必要性である。地域力を培うのに大事なことは、市民が「表方」と共に、「裏方」を担うことが重要なのである。

そして、地域を活性化していく上では、「作業をする人」、「裏方さん」を高く評価して、スポットをあてて、その大変さ、大事さ、楽しさを学ぶ機会づくり、「裏方さん」を少しでも多く生み出す仕掛けづくりが必要と言える。

②実績と信頼の積み重ねと互いの必要性による「協働」

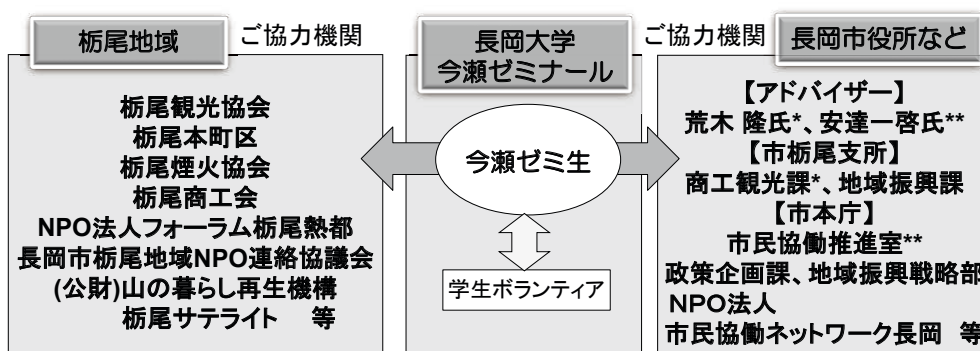
今瀬ゼミの取組みでは、白紙の状態からゼミ生が企画を立て、市役所や地域の団体、住民の方々との関係を一から作り上げていった。ゼミ活動の開始当初は、ゼミ生たちが地域の方々に、地域活性化に協力させてもらえるように一方的にお願いする関係であった。そして、始めて出会う関係であったため、双方の間には当初、どこかぎこちない空気もあった。だが、不備がありながらも、少しずつ協力させていただき、実績を積み重ねていく中で、徐々に互いの信頼関係が生まれていった。そして、ある頃からは、地域の方からも声をかけて下さるようになり、積極的にゼミ生たちと相互に協力し合ったださるようになっていった。



裏方作業後の集合写真
(今瀬ゼミ生と栃尾のスタッフ)

そして、ゼミ活動を開始して半年を経た頃には、長岡市（栃尾支所商工観光課、市民協働推進室、他）、栃尾観光協会、栃尾本町区（地区住民）、栃尾煙火協会、栃尾商工会など、様々な地域の団体・住民の方々との「協働」の関係が生まれていった。ゼミで作成したパネルの長岡市内巡回「パネル展」は、今瀬ゼミと地域の方々の双方から自然な形で沸き起こった「協働事業」であり、地域の方から自然な形で看板作成・設置などの費用や人手も提供していただいた。

今瀬ゼミの取組みを通じて浮かび上がったことは、「協働」の関係はいきなりできるものではなく、互いに誠意を持って実績と信頼の関係を積み重ねていくことで、また、互いが互いを必要とすることで初めてできるものであり、気づいてみたら「協働」していたというものである。



【引用・参考文献】

- ・長岡大学 今瀬政司ゼミナール『とちお祭への裏方参画と調査・情報発信報告書 ～長岡・栃尾地域を元気にするために～』2015年3月（ゼミ生：五十嵐信彦、澤井芳秀、須田一聖、相山祐輝、太刀川健太郎（当時3年生、五十音順））
- ・今瀬政司研究室ホームページ <http://sicnpo.jp/imase-nagaokauniv/>